

〈書評〉

唐澤一友・モート、セーラ著

『日本人が知りたいイギリス人の当たり前：英語リーディング』

(三修社、2017年)

伊 東 貴 史

「イギリスを知っていること」(to know the U. K.)と「イギリスについて知っていること」(to know *about* the U. K.)とは、互いに似て非なるものである。実際、わたしたち日本人のほとんどが、イギリスという国名やストーンヘンジなどの遺産、あるいはアフタヌーン・ティーなどといった文化を、表面的に聞き知ってはいるが、ではそれらについて何がしかの説明ができるかと問われれば、答えに窮してしまう場合が少なくないのではないと思われる。本書は、そういったいさか表層的な印象のある日本人のイギリスに対するイメージに、より一層の深みを与えるべく、英国に関する様々な事柄を、(著編者2名含む)全9名の執筆者が複数の切り口から紹介し、且つその伝達を主に英語で行うことによって読者の英語力をも向上させようという書籍である。

構成として、まず第1章「日常生活」では、イギリスにおける料理(第2節)やパブ(第4節および第5節)、あるいは鉄道(第9節)などといった、英国人の日常を取り巻く実情が紹介される。また第2章「地理歴史」では、英国の王家・王室(第12節および第13節)や爵位と敬称(第14節)、はたまたイングランドとスコットランドとの関係など、イギリスの現況を理解する際に鍵となる事柄が歴史的な視点から紐解かれ、つづく第3章「現代社会」では、昨年からの国際情勢を賑わせている Brexit の動向(第21節)に加えて、英国におけ

る移民事情（第22節）や階級制度（第23節および第24節）など、現代イギリス社会の根幹を成している部分について多面的な解説がなされる。さらに第4章「文化芸術」では、そういった社会を下支えしているイギリスの音楽（第36節および第37節）、アート（第38節）、祝祭（第43節および第44節）などといった部分に焦点が当てられ、最後の第5章「その他」では、イギリス英語の特徴（第47節から第49節）や英国人にとってのユーモア（第50節）など、それまでの章では扱うことができなかったものの、やはりイギリスを知る上で欠くことのできない部分がカバーされている。

上記した構成内容を見ても明らかのように、本書における最大の特徴の一つは、間違いなくその圧倒的な射程範囲の広さである。パブについて扱った第4節では、イギリスで友人とお酒を飲む際にグループのメンバーが1人ずつ順番に全員分のビールを買う「ラウンド制」など非常に細かな部分にも説明が及び、イギリス人の卑近な日常の一端が切り取られたかと思えば、第23、24節では、英国に残存する階級制度をテーマに、国家全体としての巨視的な視点が提示される。また、話の主題は言葉そのものに飛び火することも多く、例えば第15節では、ガイ・フォークスの日（Guy Fawkes Day）の説明にちなみ、現代英語の *guy* という馴染みのある語が、実はガイ・フォークスという人名に由来していること、そしてそこからどのように「男、奴」を表すようになったかという意味変化の過程が略説されており、大変興味深い。ある程度イギリスについて把握している者であっても、ここまで広範な事柄を全て熟知しているということはおおよそ考え難く、そういった意味で、本書はあらゆる読者に新たな発見の機会を提供していると言えるだろう。

ただ、このように幅広いテーマを扱ってはいいても、本書が「深み」といった点において皮相な印象を与えることはない。というのも、各事項に付された解説は、単なる事実や事例の羅列に終始することなく、必ずその裏にある歴史的経緯や、イギリス国民を対象とした調査、あるいは各執筆者の鋭い考察とともに語られるからである。例えば、ポップ・ミュージシャンについて扱った第36節は、ともすれば浅薄な素描に終わりがちであるように思えるところを、第二次世界大戦後における英国の福祉政策などを引き合いに出しながら、現代のようなポップ・カルチャーがいかにしてイギリス国内で醸成されてきたかということ、史実を用いて具体的に解説している。また、第17節では、スコットランド人のイングランド観という少々デリケートな問題が扱われるが、この点に関する解説も決して印象論で終わるのではなく、スコットランド人を対象

にして行われた意識調査の結果などが提示されることで、より客観的で説得力のあるものとなっている。そして、随所に散りばめられた執筆者自身の洞察も非常に読みごたえがある。とりわけ、第9節における、イギリスの鉄道システムが時刻通りに運行しない諸所の事情や、第28節で述べられる、Brexitが英国の国民保険制度に及ぼすであろう影響などに関する省察は、どれもイギリスの内部にいる人間（ないしイギリスの国内事情に明るい人間）でなければ、なかなか得難い視点である。検索エンジンを駆使してインターネットを回遊すれば、簡単な情報は即座に手に入る時代とはなったが、様々な事象についてここまで深く斬り込んだ情報をウェブ上で手に入れるのは至難の業であろうし、むしろネットに転がる情報があまりに玉石混淆している社会において、ある程度の質を（上記のような仕方）担保して提供する本書の価値は極めて高いと言ってよい。

このように、本書はイギリスに関する多種多様なテーマを、一つ一つ丁寧かつ真剣に掘り下げて解説するものだが、執筆者による英語は決して形式ばり過ぎた難解なものではなく、むしろ平易な語彙と文構造によって書かれ、ときには読者の笑いを誘うようなユーモアさえ垣間見える。第7節における、試合開始から終了まで5日ほどかかることもあるという球技クリケットに向けての、“Very relaxing for the spectators” (36) というコメントからは、イギリス人特有の皮肉が感じられ、どこかおかしみがある。また、第49節でイギリス英語とアメリカ英語の違いを象徴する言葉として引用されるオスカー・ワイルド (Oscar Wilde) の短編“The Canterville Ghost” からの一節、“we have really everything in common with America nowadays except, of course, language” (216) など、折に触れて差し挟まれるこういった滑稽さの数々が、ややもすれば退屈になりがちな解説に彩りを加え、読者を飽きさせない。

本書を読み終えたとき、読者は、個々の小さな事象について学んでいたはずが、最終的にはイギリスという国に関する包括的な知識を得ていることに気づくだろう。形式的には複数の章に分けて構成されているものの、結局のところ、その国の「地理歴史」に由来する出来事の連続が、その土地に固有の「文化芸術」を生み、それらを楽しむ人々のささやかな「日常生活」の集合体が、他にもない「現代社会」なのである。ゆえに、これらの章はそれぞれに幾度となく重なり合い、読者のイギリスに対する漠然とした認識を、より体系的なものに変えてくれる。洒落た英語に誘われページをめくってゆくうち、はじめは浅く表面的だった知識が、次第に拡がり深みを帯びてゆく快感を堪能されたい。